

活動報告

国立看護大学校 Faculty Development(FD)活動報告

これまでの研究紀要には、国立看護大学校のFD活動について報告をする機会がなかった。しかし、教員のFD活動には教育研究活動が多く含まれているので、各種の活動をまとめてここに報告する。2002～2008年度の研修やセミナーを概観すると、長期間にわたる能力開発研修、学内講師による講演や研究報告、また、最近では昼休みに短時間の話題提供などがあり、多彩な内容である。今回、次のように大別して内容を簡略に記載した。

年度別 FD 活動実施状況

	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	計
学外講師による研修・講演	1	2	4	2			2	11回
学内講師による講演・報告			3	7	8		2	20回
自主グループによる研修					17	16	1	34回
ランチョン・ミーティング							5	5回

(2008年度は12月まで)

I. 学外講師による研修・講演

1. 「PBLを学ぶ—学習環境が作り出す問題に基づいた主体的学習」(2002年7月15日～19日)

講師：Basanti Majumdar (McMaster University, Canada)

教員の教育・指導能力の向上を図るため、カナダのマクマスター大学で開発された「Problem-Based Learning 問題に基づく学習」「Self-Directed Learning 主体的学習」をテーマにワークショップが開催された。授業に出る意味、どうしたら興味をもって学習に取り組めるか、応用の利く学習、どのような教育方法がよいか、こうした疑問に応える研修であった。元来、学ぶということは、新たなものへの探究心を刺激し、創造性や達成感を求めて次のステップへと人を動機づける力をもつ。さまざまな教育スタイルを学ぶことによって、時宜を得た適切な工夫をして実際の教育に導入することが望まれる。

2. 「アメリカにおける看護技術教育・フィジカルアセスメントの実際」(2003年6月10日、13日)

講師：Skhta Pradatasundarasar (Wayne County Community College, U.S.A.)

看護におけるフィジカルアセスメントは、健康について人の反応を確認し、看護介入によって問題を予防したり、問題を取り除いたりするアプローチである。フィジカルアセスメントは客観的なデータであり、看護のケアプラン・看護過程の要素にとって重要である。入院時や健診時の完全アセスメント、循環器や呼吸器などのシステムとしてのアセスメント、呼吸などの部分としてのアセスメントの3つのレベルのフィジカルアセスメントがあり、実際のアセスメントシートを用いて説明を受けた。

3. 「大学院教育の概念と教育内容」(2003年6月20日、24日)

講師：Puangrat Boonyanurak (Saint Louis College, Thailand)

大学院教育の目的や理念を理解するために、看護専門職としての大学院教育の重要性が解説された。専門知識の獲得とその発展、さまざまな種類の知識、看護実践の4つの次元、ヘルスケア・システムの関係者、社会化のプロセスなどである。また、カリキュラムデザインを概観し、教育プログラムの主な内容、プログラムに対応した理論、修了生に求められる能力と態度の関連、学習経験と教育方法、などの具体的な内容が示された。

4. 「大学院における教育と学習」(2004年6月23日)

講師：Puangrat Boonyanurak (Saint Louis College, Thailand)

大学院における教育の目的や理念、カリキュラムデザイン、主要な概念をおさえたうえで、critical thinking, problem-based learning, evidence-based teaching/learning, outcome-focused teaching/learning, theory-directed teaching/learning などの、大学院教育に携わる教員に必要な概念と手法について紹介された。また、教官の役割を、教育・研究・サービスの3つの側面から分析し、それぞれの責任について検討した。

5. 「アメリカにおける学士教育方法—障害をもった学生の受け入れについて」(2004年7月13日)

講師：Ratchneewan Ross (College of Nursing Kent State University, U.S.A.)

看護における効果的な教育の戦略として、専門職としての能力、学生との人間関係、個人の特性、実践の評価などの視点が紹介された。また、教育の実践方法として、実際の視聴覚教材の具体例「母性と出産」を見ながら説明を受けた。さらに、身体的障害をもった学生のために、コンピュータシステムを用いた遠隔授業や、インターネットにリンクする教育方法についても紹介された。

6. 「トランスカルチュラル・ナーシング」(2005年2月1日)

講師：Carolyn S. Melby(山口大学)

トランスカルチュラル・ナーシングの定義、トランスカルチュラル・ナーシングの利用、そのジレンマなどについて説明を受けた。看護教育のインターナショナル化とグローバル化、世界におけるクロスカルチュラル看護理論の利用、具体例として地震や津波への対応のケースが示された。グローバルな健康問題の解決、国際看護ケアの枠組みなど、新しいパラダイムについての解説を受けた。

7. 「東洋医学と国際保健」(2005年3月10日)

講師：津谷喜一郎(東京医科歯科大学難治疾患研究所)

伝統医療から、evidenceに基づいた伝統的補完代替医療への転換と、ランダム化比較試験の歴史について初めに概観した。また、東西両医学の特質を、健康に関するコミュニケーション、健康の概念、健康に対する費用などで比較し解説された。evidence-based medicine については、Cochrane, Feinstein, Sackett の考え方が紹介され、narrative-based medicine の考え方も示された。

8. 「厚生労働省の科学技術政策と科学研究事業の最新動向」(2005年9月21日)

講師：高階恵美子(厚生労働省大臣官房厚生科学課)

厚生労働省の科学研究事業は、行政政策研究、厚生科学基盤研究、疾病・障害対策研究、健康安全確保総合研究の4分野から構成されている。厚生労働省では、「安心・安全で質の高い健康生活を実現する先端科学技術の実用化」を基本に、「健康安心の推進」「健康安全の確保」「先端医療の実現」を2005年度の科学技術関係施策の重点事項としている。厚生労働科学研究費のあらましと、併せて健康フロンティア戦略の推進について説明を受けた。

9. 「子どもの虐待をめぐる保健福祉の多職種連携システムと評価」(2005年9月26日)

講師：Uma A. Segal(University of Missouri, U.S.A.)

子どもの虐待予防に向けて、保健、医療、福祉の専門職が連携するシステムについて、米国での実践と国際的な動向が話された。暴力の理由、身体的・精神的・性的な虐待、ネグレクトや子捨ての定義が示された。また、体系的な介入のアプローチとチームワークの必須要因が述べられ、成功するチームとして、ゴールの重要性、段階的なチーム展開、すぐれたチームの例などが示された。変革の鍵として、社会的な認識・加害者への介入・被害者への教育の重要性が示された。

10. 「タイ王国における看護師資格と看護教育」(2008年6月2日)

講師：Sakawduean Paiboon(Saint Louis College, Thailand)

タイ王国における看護師資格の種類、免許の更新、看護協会と看護カウンシルの役割、advanced practice nurse のシステム、看護教育と教育機関について説明を受けた。また、セントルイス大学の例を用いながら、看護教育の具体的なカリキュラムとその構成について、必要な単位数、評価方法などが示された。最後に、講師の専門である母性看護学分野の研究の例として、コンピュータを使用した助産教育法の効果について紹介された。

11. 「タイ王国における認知症の治療と看護」(2008年11月5日)

講師：Suwanna Anusanti(Saint Louis College, Thailand)

初めに認知症の事例の紹介があり、その徴候、原因、タイプが解説された。続いて、タイ王国における認知症の発生率などの統計、スクリーニングの方法、予防法について説明がされた。また、セントルイス大学の一部として機能しているケアセンターの理念や活動の実際についての紹介があり、行政的な面や宗教の差によってもたらされるケアの違いについても紹介された。

II. 学内講師による講演・報告

1. 「乳がん患者への継続的看護援助」(2004年9月9日) 講師：小西敏子

自ら治療法の選択を行った乳がん患者が、乳がんを自己の人生のなかに引き受ける姿勢を形成するための継続的な看護援助について紹介された。患者が新たな生活への意欲を形成するためには、選択への後悔がないこと、術後後遺症などによる痛み

から解放されていることが前提条件で、そのうえで自己決定と患者の有能さを刺激することにより、意欲が自然に開花していくことが示された。

2. 「更年期モデルマウスにおけるザクロジュースの影響」(2004年9月9日) 講師：濱本洋子

ザクロの果実や種子には女性ホルモンであるエストロゲンが微量ではあるが含有されている。本研究では、市販されている濃縮ザクロジュースが更年期症状を緩和する効果があるかどうかを、卵巣を摘出した更年期モデルマウスを用いて検証した結果が報告された。ザクロジュースによって、マウスは卵巣摘出による骨代謝異常、うつ症状が改善できる可能性が示唆された。

3. 「心臓移植の待機期間における看護師が認知した患者の心理的反応」(2004年12月9日) 講師：山田巧

心臓移植待機患者のケアに携わった経験をもつ看護師を対象として、フォーカス・グループ面接法を用い、看護師の認知した移植待機期間における患者の心理的反応について調査した結果が報告された。質的分析を行った結果、「心臓移植自体に対する思い」「長期療養によって引き起こされる思い」「人工補助心臓 VAS 装着に伴う思い」「移植後に対する思い」が抽出され、長期化する心臓移植待機期間の患者の複雑な心理的問題が明らかにされた。

4. 「看護の人員配置と質指標データの収集と分析」(2005年4月28日) 講師：柏木公一

米国では、看護師の受け持ち患者数が1名減るたびに患者の死亡率が減るといった研究が行われ、このようなデータは米国の公的保険の退院時データセットから作られた。このデータは州により研究者が利用できないこともある。そのため米国看護師協会は、1998年から全米の病院を対象に看護の質の指標について、インターネットを通じてデータを収集するシステム NDNQI を開始した。日本でも同様の研究が可能かどうかについて、これまでの知見が報告された。

5. 「緩和ケアと終末期がん患者のリンパ浮腫のケア」(2005年4月28日) 講師：丸口ミサエ

日本における緩和ケア病棟の現状が紹介された。緩和ケアの定義、内容、緩和ケア病棟の役割、緩和ケア病棟の入院料、病棟登録のガイドライン、これからの緩和医療提供体制について解説された。また、進行がん患者のリンパ浮腫のケアについて、複合理学療法などの具体的な方法が紹介され、ケアのガイドライン作成の経過についても紹介された。

6. 「コミュニケーション意欲について」(2005年7月11日) 講師：松岡里枝子

グローバル化した社会においてはリンガフランカ(世界共通語)として英語を運用することは多くの分野で必須となっている。ところが、日本人の英語コミュニケーション能力は他の東アジア諸国と比しても劣るとされている。紹介された研究では、英語習熟度、モチベーションともに備わっているにもかかわらず、英語コミュニケーションを困難とする学習者に焦点をあて、個人差をもたらす諸要素とコミュニケーション意欲の関係についての結果が示された。

7. 「国際実習で4年生はタイの人たちとどのようにコミュニケーションしたか」(2005年9月14日) 講師：熱田泉

2005年の国際実習は、医療機関、高齢者ホーム、AIDS ホーム、コミュニティでの見学実習がデザインされている。学生たちは初め不安と緊張でいっぱい、話したいという気持ちはあるが、「聞き取れない」「文法を間違えないか」という思いで交流できないでいた。ベテランの先生方は、キーワード1つで質問を理解してくれ、寮生活ではタイの学生であるバディが親切に世話をしてくれた。そのなかでコミュニケーションは文法や言葉だけではなく、言葉は不自由でも気持ちを伝え合うことが本質だと学生たちは気づいた。

8. 「国際看護師協会第23回大会(台湾)の報告」(2005年9月14日) 講師：Carolyn S. Melby

国際看護師協会の第23回大会が2005年5月22日から台湾の台北で行われ、127以上の国から4,000人が参加した。カンファレンスのテーマは、「変動する看護：知と変革と活力」。基調講演では、高度な看護の実践、遠隔ケア、看護師としての新しい役割の獲得など、看護が大きく変わろうとしていることが示された。具体的には、看護師不足による看護の労働力の問題、伝染性疾患への対応、医療政策への関与、災害に対する看護職の役割などが報告された。

9. 「生涯発達ケアとエンパワメント—コホート研究と脳科学の新展開」(2006年3月16日) 講師：安梅勅江

科学技術振興機構と大学、医療機関との共同研究で、小児科学、脳科学、発達心理学、教育学など、分野を超えたさまざまな専門家によるコホート研究が紹介された。子どもの発達に影響を与える環境要因を解明し、子どもたちにとってふさわしい環境は何かを探り、子どもの発達上の問題に解決の糸口を探ることを目的とした研究である。地域・グループと末永く付き合い、研究者と協力者がお互いに成長するエンパワーの視点が重視されている。楽しく記入できる調査表の項目についても紹介された。

10. 「日本の経済・社会・政治の中で看護はどのような位置を占めているか」(2006年3月16日) 講師：森山幹夫
看護制度の現状について、経済的には医療に携わる250万人の半分以上の130万人が看護職であること、また、医療費32兆円のうちの半分が人件費であり、そのうち4分の1は看護職であること、看護職が中心となってつくった法律には高齢者虐待防止法など多くのものがあり、日本の法律1,840のうち50は看護師に関するものであることなど、看護の大きさが示された。高度医療のなかの看護から地域在宅福祉の看護まで、看護が幅広く国民に期待されていることが再認識された。
11. 「フィジカルアセスメント教材のデモンストレーション」(2006年4月13日)
フィジカルアセスメント教材・シミュレーターシステムのデモンストレーションがLMI職員によって行われた。触診、聴診を行えるトレーニング用のシミュレーターを実際に操作した。
12. 「診療報酬制度について」(2006年5月16日) 講師：森山幹夫
医療保険における診療報酬制度について、その制度の概要と問題点について紹介された。2006年4月に改定された新診療報酬体系のなかでは、従来の最高2対1看護が1.4対1看護に引き上げられた。その意味は、看護職が多ければ多いほど診療報酬が増えるという原則が貫かれていることを意味するものである。看護の質の向上に対する影響、今後の展望などについて参加者で話し合った。
13. 「中国の緩和ケア看護の現状」(2006年5月16日) 講師：陳秀琴(中国、日中友好病院からの研修生)
中国で緩和ケアは「姑息治療」と称されており、1980年代に緩和ケアが導入された。1994年には緩和ケア専門機構「姑息治療専門委員会」が発足した。現在、中国のがん患者は約200万人であるが、緩和ケア病棟は非常に少なく、また経営も困難であり、患者のニーズを満たせていないのが現状である。末期がん患者に対するスピリチュアルケアも提供されていない。緩和ケアに携わる専業看護師を育成する教育システムの整備が急務である。
14. 「保健医療制度改革と看護」(2006年7月26日) 講師：田村やよひ
2006年の通常国会で成立した保健医療制度改革の全体像について説明があり、教員の理解を深めた。なかでも特に、保健師助産師看護師法に関する改革と医療法については詳細な解説が行われた。①保健師、助産師免許の申請にあたって看護師国家試験合格を求めること、②名称独占の規定を整備したこと、③行政処分に新たな「戒告」の類型が定められ、被処分者には再教育が義務化されたこと、さらに、④助産所の規定に、嘱託する医療機関が追加されたこと、⑤医療法施行規則に病院における看護記録の保存が追加されたことなどである。
15. 「エンカウンター演習の現状と課題」(2006年9月13日) 講師：鉦鹿健吉
2年生の「エンカウンター演習」は、人にかかわる援助力を高めることを目的にして、主にスモールグループで演習が行われる。受容についてはセルフチェックとグループワーク、他者理解では映画を編集した視聴覚教材が使用され、会話力の向上のためにはロールプレイが行われている。効果を短時間で測ることは難しいが、過去のデータをもとに現状と課題について話された。
16. 「研究の倫理審査について」(2006年9月13日) 講師：石井智香子
研究の倫理審査を受けた経験から、申請書・研究計画書などの書類の記載留意点について説明された。特に研究計画書は、研究計画の文献レビュー、研究の目的と意義、方法論、研究の限界、倫理的配慮などを明解かつ論理的に記載することが重要である。また、倫理審査ではさまざまな視点からの質疑応答があり、計画の修正が求められるが、このようなプロセスを経て研究計画が承認されることに意義がある。
17. 「国立看護大学校における博士課程の設置—現状と課題」(2006年10月12日) 講師：田村やよひ、松井和子
本学の研究課程部修士課程は2005年4月に開設されているため、今後は博士課程の設置が望まれる。このことを踏まえ、その可能性について検討している経過が報告された。博士課程設置に向けた本学の課題として、教官の研究活動の活発化の必要性が説かれた。
18. 「新しい心肺蘇生法のガイドラインについて」(2007年3月14日) 講師：飯野京子
心肺蘇生に関する「国際ガイドライン2005(AHA)」が2005年に改訂され、2006年6月に日本語版である「救急蘇生法の指針改訂3版(市民用)」が出版された。今回は新ガイドラインに沿った心肺蘇生の内容について、実技を行いながら説明があり、また、学校や公共の場所に設置されるようになったAED(automated external defibrillator, 自動体外式除細動器)の操作方法についても紹介された。実技指導：川畑安正、岡本隆行、上川智子、小熊亜希子

19. 「SPSS を使って統計処理をする方法」(2008年8月18日) 講師: 柏木公一, 水野正之

情報処理室にて, SPSS16.0J を用いて統計処理を行う方法について, 演習中心の講義がもたれた。アンケートの調査表を実際に使用して, データの入力から始まり, 棒グラフなどの作り方, 記述統計値の計算, *t* 検定などの有意差検定などを含め, さまざまな例で演習を行った。

20. 「最近の若者の心理と行動」(2008年9月18日) 講師: 鉦鹿健吉, 松岡里枝子

若者の心理と行動について心理学的および社会学的な説明と討論が行われた。盗難事件やストーカー行為と関連して, 反社会的な行為に及ぶ心理状況について説明があり, 秋葉原事件を例に, 社会学的に「世間」をとらえた阿部の世間学を用いての分析が紹介された。若者にとっての「世間」が, 彼らのアイデンティティとどのようにかわるのか, また犯罪行為を引き起こす要因になるのかについて議論が交わされた。

Ⅲ. 自主グループによる研修活動

「教官研修の進め方についての全体討議」(2006年4月10日)

自主研修として取り組みたい課題が参加 31 名の教員から提出された。それをどのようにグループ分けして研修をするかについて話し合った結果, 下記の 3 グループに分かれて 2 年間の自主研修活動を進めることになった。

< A. 授業改善グループ: メンバー 10 名 >

A-1 「今後の方向性の検討」(2006年7月3日)

今後の活動について, ①教育スキルを向上させるための peer review をする, ②領域を超えた授業方法について検討する, ③一般教育と専門教育の連携を検討する, ④学生の自発性や自分で考える能力をどう形成するかについて検討する, が確認された。参加者 10 名は, メンバー相互間で授業の見学, 特定のツールの使用の工夫, 学生の特性についての意見交換, 授業の効果判定方法についても関心を示した。

A-2 「パワーポイントの使い方」(2006年9月5日)

柏木講師によりパワーポイントを使う講義方法について, パワーポイントを使った模擬授業の形式で研修が行われた。板書との比較, 学生の特徴をつかんだ資料作り, その例として, クイズ, 穴埋め, イラストの入れ方, 表の入れ方, 配色の工夫, アニメーション, 動くイラストなどについて, 具体例を示しながら説明がされた。

A-3 「授業見学の申し合わせと具体的な手続きについて」(2006年10月12日)

数名の授業担当者から, 見学を受け入れるとの申し出があった。日程と内容, また見学参加者に期待することが話し合われ, 見学会の計画表が作成された。

A-4 「学生の自発性・主体性を育てる」(2006年11月20日)

学生の自発性・主体性について, 授業の様子が話し合われた。学生は, 学習への意欲, 知識の量, 共感性, コミュニケーション能力に大きな個人差があり, これらが自発性にも影響する。主体性を育てる工夫例としては, プレゼンテーションをさせる, 読ませたい本のリストの提示, 学生の相互評価を成績の参考にする, グループディスカッションの活用などの例が報告された。また, 授業でのグループワークの利点と欠点についての具体例が報告された。

A-5 「授業見学会の結果報告」(2006年12月20日)

授業見学会の報告として, 見学した人・された人の意見を中心に話し合いが行われた。また, 前回のテーマの継続として, 学生の特性を理解した授業の工夫について, 出席カードの工夫・受講態度の指導の例などが話された。

A-6 「看護技術の重要度について」(2007年1月31日)

卒業生へのアンケート「看護技術の重要度」の結果について, 柏木講師から話題提供がされた。卒業生は, 学んでおきたかったことのトップに「疾患の知識」を挙げ, 学習した内容と臨床の現場に違いを感じたと回答していた。疑問をどうもたせるか, 看護のおもしろさをどう伝えるか, 実習の工夫, 実習の後に何が大切かなどが話し合われた。

A-7, 8, 9 「講義の工夫例と受講態度」(2007年3月14日, 4月4日, 8月6日)

竹内教授から授業の工夫として, 学生の身近な題材を利用して簡単な調査を行い, そのデータを用いて統計計算を行う例が示された。また, レポートがコピーペーストにならない工夫と, 資料を丹念に作り直す効果などが話された。柏木講師からは学生の授業態度についての話題提供があり, たとえば遅刻などへの対応例と効果的な指導をめぐって意見交換がされた。ま

た、学生が研究室に来やすいような工夫についても話し合われた。

A-10 「講義の工夫」(2007年8月31日)

水野講師から「生活習慣と健康障害」の講義における工夫が紹介された。疾患にばかり注目しないで健康な側面に対するアプローチを重視することや、事例検討において学生に現実感覚がない場合、現実検討をするところから始める必要性について紹介された。後半は、受講態度についての話題提供があり、教員それぞれが問題意識をもって学生にかかわっていくことが話し合われた。

A-11 「学生の問題点と具体的な対処」(2007年11月9日)

遠藤講師から担当講義・実習についての報告があり、参加者から活発な発言が相継いだ。学生の基礎知識、事前学習の不備への対応として、小テストの工夫とテストの難易度の調整について話し合われた。また、身だしなみ、言葉遣い、服装への指導の方法が話し合われ、個人的な指導を要する学生には、繰り返し指導する必要があることなどの意見が出された。

A-12 「学生に必要なものと教員が提供できるもの」(2008年3月9日)

広い視野と関心、自発的な学習意欲、接遇の会話力などをどのように習得させるかが話題となった。教員がそれらを提供しようとする際には、教員の感性、問題意識と意欲、上手な会話力、カリキュラム全体を包括する視点など、教員が学生にかかわる力量を高めておく必要性が指摘された。

A-13 「学生の成長を求めて」(2008年3月25日)

熱田教授から、①何も知識をもたない学生は「白紙のノート」ではなく、とてもよく「知っている」こと、②正解を詰め込まれた学生はパターン化していて成長がしにくいこと、③学生が「感じることを大切にし、それを表現できる場を提供すること、④主体的に学びたいような刺激の工夫、などについて語られた。教育の価値観をめぐる興味深い質疑応答が行われた。

< B. 看護実践能力向上グループ：メンバー 11 名 >

B-1 「グループの方向性について」(2006年7月5日)

グループの方向性として卒業時の到達目標や、実習の現場スタッフとのコラボレーションについて話題となった。また、成人看護学の実習内容や方法が報告され、実習での学生の実態が話し合われた。実習に対するスタッフ側の教育観の違いも指摘され、実習に至るまで学内でどのように授業と演習が積み上げられているのかについても話し合われた。

B-2, 3 「どのような講義や演習がされているか」(2006年8月23日, 10月18日)

基礎、成人、小児、老年の各領域の授業・演習の資料を参考に、どのように授業や演習を行っているのかが報告された。その結果、それぞれの学習が学生のなかでうまく関係づけられていないという意見が出された。また、4年間の教育で知識や技術の習得以外にも、自分で判断できる能力、自分で考える力を身につけることの重要性が指摘された。

B-4 「実習・講義での事例」(2006年12月16日)

実習・講義のなかで、主に次の3点、①基本的な疾患、解剖生理についての理解、②看護計画の作成方法、③実習の目的と実習の評価、を中心に事例が話し合われた。臨床活動を意識して学ばせること、学生へのプラスの評価をすることなど、対応策が話し合われた。

B-5 「看護技術の習得について」(2007年1月23日)

資料をもとに、学生時に習得すべき看護技術について検討がなされた。卒業生の意見としては、働き始めて病態や薬剤などの知識が不十分であることを訴えるものが多いこと、清潔ケアなどの比較的安全なケアの実習が多く、吸引などの技術を習得する機会がなかったことなどが紹介された。後半は、実習の記録の持ち帰りについて、その利点・問題点が話し合われた。

B-6 「1年間のまとめと振り返り」(2007年3月1日)

1年間の自主研修のまとめとして、学生の実践能力を上げるためにどのような問題があるのかを整理し、対応について話し合われた。今後も継続して、知識、技術、態度の3点から検討していくこととした。

B-7 「活動報告とまとめ」(2007年4月4日)

学生に関する問題点と対応をテーマに話し合いがもたれた。その結果、①学生の知識の範囲、特に病態や解剖の知識について、②卒業時の技術のレベル、③学生の意欲、④学習態度、の4点を中心に話し合われ、これに対する対策について意見が出された。学生が正しい専門用語を使用して説明ができるように、指導を徹底することも話し合われた。

B-8 「人間関係能力の発達」(2007年6月7日)

看護実践の基礎となる学生の人間関係の能力について、理解力、受容力、会話力を中心に話題提供がされた。他者への無関心や自閉的な引きこもり、自己中心性、攻撃的・支配的な態度などを発達心理的な課題として説明された。その能力の向上には、セルフチェック、援助的なモデルの提示、チームワークの経験などが効果的であると報告された。グループワークを取り入れた授業では、具体的にどのような人間関係の問題が生じているのかが話し合われた。

B-9 「卒業生の状況から」(2007年8月23日)

臨床教員の奥坂講師から、卒業生(1～3期生)の状況についての報告があった。話題としては、①学生実習と仕事とのギャップ、②指導に萎縮する、がんばりすぎる、思い込みが強いなどの適応問題、③コミュニケーションスキルに差がある、④専門知識の不足、などが挙げられた。大学での教育に対しては、振り返りと自己評価を習慣化する、接遇を含めたコミュニケーションスキルの教育、総合実習の充実などが期待された。

B-10 「学生のマナー」(2008年3月12日)

参加者から学生のマナーと生活習慣の問題が挙げられ、意見交換がされた。一部の学生に見られる、挨拶をしない、時間を守らない、片づけができない、などの例が出された。学生と話してみると、他人に迷惑をかけていることに気がついていないことがわかり、改めてマナーなどを教えなくてはならないことを確認した。

B-11 「実習目標達成を支援する教授活動の展開」(2008年3月25日)

中山准教授から、質の高い教授活動の実現に向けての取り組みが紹介された。産出した成果による問題の解決、自己評価による課題の発見、新たな研究への着手という展開が示された。教員の行動を表す概念、実習カンファレンスを展開する概念などが具体的に説明され、学生を支援するには着実な自己評価が効果的であることが示された。

< C. 大学校は何ができるかグループ：メンバー 10 名 >

C-1 「何ができるか・どうできるか」(2006年7月25日)

参加者一人ひとりからこのグループで何をしたいかについてさまざまな意見や提案が出された。地域の病院との連携、教育理念の確認、政策医療のテキスト作成など専門領域を超えての連携、災害時の援助体制や役割、継続教育の提供、などであった。提案されたなかから、教育理念、災害時の体制、政策医療については、話題提供者が選ばれた。

C-2 「ヒューマンケアの理念」(2006年9月27日)

本学の理念であるヒューマンケアとケアリングについて、話し合いがもたれた。看護理念(哲学)を確立したジーン・ワトソンを中心に、看護におけるケアとはいかなるものかについて、ハイデッガーの現象学にも触れながら話し合いが進められた。看護の場を周知している参加者からは、看護場面の具体例と理論を結びつけるコメントが寄せられた。

C-3 「災害時に看護大学校は何ができるのか」(2006年12月4日)

前半は亀岡教授により、阪神・淡路大震災でボランティアとしてかかわった経験をもとに、災害時の実際の活動についての紹介が行われた。後半は、西尾学部長、上川助手により、地域における災害時の具体的貢献についての提言が行われた。また、学生に対する災害時の対処方法・指導についても話し合われた。

C-4 「今年の進め方」(2007年7月30日)

2006年度に行った話し合いの内容を確認したうえで、発足当初からの活動を振り返って、グループとして再度意見交流をした。2006年度提案されたテーマについては引き続き2007年度に議論を進めていくことで合意した。

C-5 「政策医療について」(2007年8月10日)

森山教授から政策医療について、その概念と看護の方向性について説明を受けた。学生の教育に携わるものとして政策医療をどうとらえるか、その位置づけについて話し合われた。

C-6 「研修部について」(2007年8月30日)

継続教育の具体例として、研修部でどのような内容で指導しているのか、丸口教授、小西准教授から紹介された。看護師である研修生が受講できるシステムとして、どのようなカリキュラムで学び、いかなる資格を取得できているのかについて情報が提供された。

C-7 「地域連携の例について」(2007年11月19日)

自主グループ発足当初、他大学や地域と連携をして活動する可能性について提案されたが、その参考として実際に聖路加看護大学や群馬大学が、地域とどのような形で連携しているかについて資料をもとに説明がされた。本学が地域と連携をもつ可能性を探る議論へと結びついた。

C-8 「本学の英語教育について」(2007年11月19日)

松岡教授から本学での英語教育について説明があった。国際社会の一員となるのに必須であるリンガフランカとしての英語の教育が、どのような理念のもとに、4年間にわたりいかなるカリキュラムで行われているか、具体的に何を目指して指導にあたっているのか、実際のコミュニケーション力がいかにほどであるかなどについて説明された。

「共同研究についての報告と打ち合わせ」(2008年8月27日)

2006～2007年度に行われた3つの自主研修グループの概要とその成果についての報告があった。参加者から、授業の工夫や最近の学生の様子などについて意見が出された。また、授業で困難を感じている点についての話題提供があり、それに対して熱心に意見が寄せられた。継続的に共同研究を行うことについては見送られた。

Ⅳ. ランチョン・ミーティング

1. 「今までのこと、これからのこと」(2008年8月21日) 綿貫成明准教授

せん妄の研究に取り組んだ経験と、看護師のアセスメントとケアの特徴について話された。また、NEECHAM Confusion Scaleを翻訳したことから、その活用についても説明を受けた。

2. 「科学研究費について」(2008年9月11日) 柏木公一講師

研究費の申請書類を具体的にどのように書くのか、研究費の使い方や注意を必要とすることなどが話された。研究費に関する各種マニュアルや参考になるガイドブックについても紹介があった。

3. 「タイの精神科看護について」(2008年10月9日) Suwanna Anusanti, Saint Louis College 准教授

スワナ先生の自己紹介の後、参加者9名が自己紹介に加え、スワナ先生への質問を行った。それにスワナ先生が丁寧に答えるという形で、日本とタイの精神科医療の違いを中心に話が展開した。

4. 「薬物の問題と医療観察法」(2008年11月13日) 田中留伊講師

「覚せい剤精神病患者への援助」「鑑定入院における看護の役割」などの研究テーマが紹介された。2005年に施行された「医療観察法」の説明があり、薬物依存症者の治療にかかわった経験から、指定入院医療機関での効果的な看護について説明を受けた。

5. 「医薬品の安全性の研究」(2008年12月11日) 竹村玲子教授

海外の医薬品の安全性情報を医療者向けに情報提供した経験や、海外の主要な副作用のデータベースについて話題提供された。また、安全性の情報がどのように国民に知らされるのか、そのシステムは国による特徴があることも紹介された。